主日の福音 2026/10/11(No.1437)

# 年間第 28 主日（マタイ 22:1-14）

## 見かけた者は誰でも婚宴に連れて来なさい

今週イエスが祭司長や民の長老たちに語ったたとえ話は、王は父なる神、王子はイエスを念頭に置いて語られたと考えて良いでしょう。招いておいた人々を呼ぼうとしましたが、最初は来ようとしません。そこで再び、婚宴がいかに念入りに用意されたものであるかを具体的に述べて、王の心からの願いをもう一度考えさせます。

それなのに、招いておいた人々は、それぞれが身勝手な理由で招待を無視し、もっとひどいことに、王の家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまいます。「婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。」（22・8）ここで王は、「招いておいた人々」だけが集まる婚宴から、「だれもが招かれる婚宴」へと向かっていきます。

王になぞらえられている父なる神の救いの計画は徐々に明らかになります。先週の朗読を振り返ると、「だから、言っておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる」（同 21・43）と言われていました。最初から神の招きはすべての人へ向かっていたのでしょう。ただ、救いの歴史の中で、招きが次第にはっきりと示されていった、と考えられます。

しかし、王の大胆な招きには驚かされます。「町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい」（22・9）。当然、善人も悪人も集められることになります。王は、婚宴への招きの門を大きく開きました。私に、同じことができるかなぁと考え込んでしまいます。「見かけた人はだれでも」というのは、無謀すぎるのではないでしょうか。

無謀のようにも思えますが、王になぞらえられた父なる神の思いはここにあるのでしょう。招きを受け入れる人であれば、善人でも悪人でも、婚宴の席につくことができるのです。どれだけ集められても、受け入れる席があるのです。十字架上のイエスが、犯罪人の一人にそのことを示しています。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください。」「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（ルカ 23・42-43）。

私たちは、父なる神の思いを受け入れることができるでしょうか。「見かけた者はだれでも連れて来なさい。」悪名高い人も、その人が招きを受け入れたなら同じ席につくことができる。名だたる悪人でなくても、いつも自分にばかりあたってくる人、やることなすことケチをつける人。私のほうが同席を断りたいと思う人であっても、招かれて応じるなら、席が与えられるのです。その婚宴の席に、私も連なることになる。これを、本当に受け入れられるでしょうか。

この地上では、自分が「招待客」であっても、参列者の中に同席したくない人がいれば、拒むことができるかも知れません。しかし、王子

の婚宴の席は、そうはいきません。王が「見かけた人はだれでも婚宴に連れて来なさい」とおっしゃったのですから、見渡して「あっ！あの人がいるから嫌だ」そう思っても、これは身勝手な思いになります。王子になぞらえられているイエス・キリストの宴席に、「あの人がいるなら私は出席しない」は通用しないのです。この、父なる神の思いを、心の底から受け入れることができるでしょうか。

朗読箇所の最後に、「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」（22・14）とあります。朗読の中では「礼服」を身に着けていない人が、外の暗闇にほうり出されましたが、これは置き換えると「善人も悪人も招き、応じた人はだれでも席につくことができる」この父なる神の思いに共感できる人かどうか、ということです。「あの人と同席したくない」という私の心に気づいたとき、思いをそのままにしておくのか。それとも、神の招きにふさわしい心へと変えていただこうとするのか。婚宴の礼服を拒む人になり、外の暗闇に出されても仕方ない状態を自分で作るのか。「選ばれる人は少ない。」これまで私は、父なる神の心の広さを受け入れられない人のままだったかも知れません。

私たちは、自分の心の狭さに気づくたびに、礼服を着せていただく必要があります。招かれる人は多いのですから、何としても父なる神の思いを理解し、生き方を神の思いに合わせる必要があります。そのために、御子イエス・キリストが遣わされ、どのように生きれば父なる神の思いに沿うことができるのかを身をもって示してくださったのです。

「礼服」を着ないで婚宴の席に入ってきた人は、せっかく弁明の機会があったのに弁明しませんでした。同じ場面に私が置かれて弁明しないとすれば、些細な理由だからだと思います。「あの人がいるから、私は同席したくありません。」たったこれだけを直せないで、婚礼の席からつまみ出されるとしたら、何ともったいないことでしょう。そのような些細な理由が、神には「礼服を着ないで入ってきた」と見なされるとしたら、悔やんでも悔やみきれません。

この地上で、ミサに参加するとき、あなたはすでに襟を正す機会を頂いていると考えるべきです。私たちが主の食卓に着くことができるのは、私たちが立派だからではありません。私たち自身もまた、招かれた者だからです。だれかを見下したまま、ミサに参加していないでしょうか。あなたが見渡した中に、嫌な気分にさせる人がいないでしょうか。

その気持ちを乗り越えて、「神の子羊の食卓」に皆が招かれることを幸いと思える人になれますように。主は、「私」も「あの人」も同じ食卓に招いておられます。その事実を、私はどう受け止めるのか問われています。ミサの参加を父なる神の思いをより深く理解する「恵みの場」としましょう。

年間第 29 主日(マタイ 22:15-21)